

<学びの教室コラム> 「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

特別な支援を必要とする子どもたちとの出会いを通して

藤田則恵

1 はじめに

このたび、鳥取大学の学生向けに「特別支援教育」について講義をする機会をいただいた。私がなぜ教員になろうと思ったかを改めて思い起こし、これまで出会った子どもたちから得たこと、教わったこと、感じたこと等を学生の皆さんに伝えることを通して、教員という職業の魅力を感じてほしいと思った。そこで、テーマを「特別な支援を必要とする子どもたちとの出会いを通して」に決めた。

小中学校の頃、私は教員になりたいと思っていなかった。きっかけは姉に誘われて観た映画「奇跡の人」にある。サリバン先生とヘレンケラーとの格闘場面。厳しくも人間愛を感じ手話やことばの獲得等への関心から、教育大学の聾学校教員養成課程に進んだ。教員免許取得のための教育実習で聴覚障がいのある幼児や重度重複障がいのある児童との出会いが、私を教員への道へと歩ませてくれた。そこから特別な支援を必要とする子どもたちとの歩みが始まった。

2 教育実習での出会い

私が大学生の頃、当時、日本の多くの聾学校では聴覚口話法が中心で、聴覚活用を主にした指導であった。聾学校での教育実習で出会った幼稚部の子どもたちは、手話やキューサインなどの手がかりがない中で、必死に「みる、きく」をがんばっている姿が愛おしかった。養護学校の教育実習で出会った小学部第1学年のAさんは、学校の隣にある病院から通ってきていた。お話が大好きではあったが、一人では座位がとれない、寝返りができないという状況だった。Aさんは実際に蟻に触ったり、満天の星空を見たりする機会はなかったように聞いた。私は、Aさんの世界を少しでも広げたいと思い、3週間の教育実習中、絵本につながる平仮名文字の学習や学校周辺の散歩で自然を感じる学習などを行った。学習を楽しんで取り組むAさんの様子が、私を教員への道へと歩ませてくれた。

3 特別支援教育の現状

平成19年4月学校教育法の一部改正により、盲学校・聾学校・養護学校が特別支援学校に一本化された。また、特別支援教育は、障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立つことや知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものであることが示された。

昨今の状況として、文部科学省の資料から直近10年間で義務教育段階の児童生徒数は1割減少する一方で、特別支援教育を受ける児童生徒数はほぼ倍増、特に特別支援学級、通級による指導の増加が顕著であることがわかる。こうした状況を踏まえ、子ども一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実が求められている。

4 小学校、特別支援学校の教員時代の出会い

20代の頃、小学校の障がい児学級の担任やことばの教室（通級による指導）の担当を経験した。素直な子どもたちと一緒に学校生活を送る中で、専門性の大切さを痛感し、改めて障がいの理解や指導・支援に係る実践や研究等を深く勉強したいと思った。

30代～40代前半、特別支援学校で勤務した。養護学校では、肢体不自由や病弱のある重度重複障がいの子どもと出会った。一日一日を大切に生きている子どもたち。ともに生活していると、子どもたちの自発的な動きと思える動作に出あえる。「視線」「まばたき」「手足の動き」等、子どもからの発信として捉える力が養われた。教員はチームで考える機会を多くもち、知恵を出し合いながら、一人一人の教育的ニーズに応じた教材・教具づくりなどにも取り組んだ。

聾学校に赴任した1年目。ある児童から「先生が何を言っているのかわからない」とメモを渡されたことがある。きこえない・きこえにくい状況の中で、子どもたちは一生懸命に学習に取り組み、発音練習を家庭でも行っていた。私も努力することをやめてはいけなく強く感じ、毎日先輩教員からキューサインや手話を学んだ。コミュニケーションの問題だけではない。聴覚障がいの特性を理解し、指導方法等の研修が必要であった。当時の小学部では「体験的活動を通して、からだ全体で感じる、心に響く」授業実践に取り組んでいた。例えば、稲づくり。田起こし、代かき、田植え、水の管理、稲刈り、脱穀、精米等を通して、感じたことをダンスに表現したり、文章にまとめ発表したりした。子どもたちが笑顔で生き生きと取り組む姿が印象的だった。

5 管理職時代の出会い

「学校が楽しい。」「明日も学校に来て友だちと話がしたい。」「先生と〇〇がしたい。」そんな学校をつくりたいと思った。子どもも教員もわくわくできるような学校を。これまで出会った子どもたちが私に教えてくれたように思う。担任のときも管理職のときも、子どもたちと過ごす中で、「ともに笑い、ともに考え、ともに歩む」ことの大切さを私に教えてくれた。

6 きこえない・きこえにくい子どものサポートセンター『きき』で大切にしていること

現在、私は鳥取県きこえない・きこえにくい子どものサポートセンター『きき』に勤務している。これまでの出会いを通して得てきたことを新しい職場でも大切にしたいと考える。特別な支援を必要とする子どもや保護者が何を望んでいるのか、支援者としてどのようなサポートができるのか、ともに考えていきたい。

7 おわりに

最後に、私の実践をさいてくださった学生の皆さんに、月刊「致知」平成17年12月号及び「小さな人生論3」藤尾秀昭著（到知出版社）「第五話 たった一年間の担任の先生との縁」を紹介した。人と人との「出会い」や「縁」が子どもの生き方に影響することがある。障がいのある・なしに関わらず、日々子どもの様子をみることや寄り添うことは大切なことである。これからも「出会い」や「縁」を大切にしながら人として成長していきたい。

藤田則恵（鳥取県きこえない・きこえにくい子どものサポートセンター『きき』相談員兼コーディネーター）